

3月28日
開園

石巻南浜津波復興祈念公園

残り続ける まちの記憶

私たちが日常の会話で度々、交わす「震災前」「震災後」という言葉。生活が変わった東日本大震災から間もなく10年が経ちます。それぞれが過ぎた、この10年は長かったり、短かったり。もしかすると、早く感じた時や、ゆっくり感じた時もあるかもしれません。

今回は、震災前の暮らしの記憶を残し、追悼と鎮魂の思いを込めて3月28日に開園する「石巻南浜津波復興祈念公園」を紹介します。園内には国営の追悼祈念施設となる「祈りの場」や、展示を通じて津波の恐ろしさや復興状況を紹介する「みやぎ東日本大震災津波伝承館」をはじめ、市民が日常的に使える広場や遊具もあります。



▲みやぎ東日本大震災津波伝承館 3月28日オープン

開館時間	9時～17時	休館日	毎週月曜日、祝日の翌日、年末年始
入館料	無料	その他	月命日の11日は毎月開館



公園が整備されるのは、日和山公園から見渡せる場所にある石巻市の南浜町。広さは25メートルプール約1240個分に相当する38・8ヘクタールで、震災前には約4700人が過ごした地域だ。東日本大震災の津波による被害が大きく、石巻市は人が住めない災害危険区域に指定し、跡地利用として復興を象徴するような「鎮魂の森」を構想。被災3県で1カ所ずつ国営の追悼・祈念施設が設置されることになり、有識者による話し合いなどを経て、公園のデザインを決めてきた。2017年3月に起工式が行われ、石巻市と宮城県、そして国が一体となって整備を進めてきた。

みやぎ東日本大震災津波伝承館

円形平屋の「みやぎ東日本大震災津波伝承館」は管理棟と展示機能を備える公園の中核施設だ。館内では「かけがえのない命を守るために、未来へと記憶を届ける場」をコンセプトにした映像やパネルを通じて、津波の恐ろしさや各地の被害と復興状況を紹介する。

被災3県で1カ所ずつの施設であるため、宮城県内の被害の全体像が把握できるほか、かつての県内の風景や各地の団体、企業、人の取り組みを伝える展示も並ぶ。施設の最も高い所がこの地を襲った津波と同じ高さの6・9メートルとなっている。

木へへと成長する苗木

いろいろな立場の人々が参加し、協力しながら作り上げていく方針の石巻南浜津波復興祈念公園では、行政や市民、企業、NPOなどの協働で、2023年を目標に約10万本の苗木の植樹が行われる予定だ。このうち、6万本を市民による協働で整備するとし、沿岸部や南浜の地で育った苗木を植栽。この土地の風土にあったクロマツやアカマツ、ヤマハギ、ケヤキ、コナラなど約70種類の樹木が育ち森を作る。

苗木を強い風から守る「静砂垣」で囲われた場所が、森となる植栽エリア。長い時間がかかることになるが、市民が見守り育てること、数十年後には、緑豊かな森となる。所々には「桜の木」も植えられることから、春には満開の桜も見られる。月日の経過と共に森が成長し、めぐる季節の中で色を変えていく。



▲人々が行き交った街の記憶や、かつての土地の履歴を再生した復興祈念公園が間もなく開園を迎える（2月2日撮影・石巻市提供）



▲2023年を目標に約10万本の苗木の植樹が予定されている



▲風から苗木を守る「静砂垣」で囲まれた場所が植栽エリア



▲園内には植栽済みの場所もあり、徐々に「鎮魂の森」として成長していく



▲2018年9月に行われた植樹祭の様子



かどのわき町内会会長
ほんま えいいち
本間 英一さん

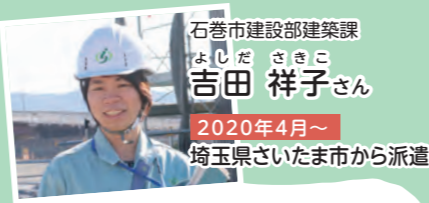
自然豊かな南浜の海岸には緑の松林があったり、私が子どもの頃には田んぼが広がっていました。樹木を植えて、慰霊の森になるのは良いことだと思います。公園とMEET門脇、旧門脇小学校校舎が連携しながら、慰霊の場として、一体感のある公園になってほしいです。



石巻市建設部建築課
はたなか ゆい
畠中 優衣さん

2020年4月～
鹿児島県鹿児島市から派遣

石巻市職員の見学機会があり、微力ながら役に立てる事があればと思い石巻にきました。担当した雲雀野広場のあずまやや、駐車場前の作業棟の工事を担当して、良い経験をさせていただきました。数十年かけて森となる、公園を見守り続けていきたいと思っています。



石巻市建設部建築課
よしだ さきこ
吉田 祥子さん

2020年4月～
埼玉県さいたま市から派遣

職場先輩の災害派遣をきっかけに、学んだ事を生かして、復興のお手伝いをしたいと思い石巻にきました。担当した一丁目広場の「作業棟」の建設を通じて、石巻の皆さんの思いにふれ、震災当時の状況も学びました。笑顔が、あふれる公園になってほしいと思っています。



石巻市復興事業部基盤整備課
いしやま さやか
石山 彩加さん

2020年4月～
新潟県新潟市から派遣

成長する機会になると思い石巻にきました。工事の大型車両が行き交う、公園東側の新設道路「南浜東1号線」の施工を担当し、民間事業者の皆さんとの調整業務も行いました。森を見守りながら、大勢の方に使っていただける道路なので、大事に利用してほしいと思います。



石巻市復興事業部基盤整備課
ふなだ みか
舟田 実夏さん

2020年4月～
東京都墨田区から派遣

仙台の親戚との石巻訪問をきっかけに、石巻での勤務を希望していました。担当した雲雀野広場の「遊具」は子どもたちが年齢に合わせて遊べる遊具で、来園者が祈る時にも目立ちすぎない配色にしています。生活の一部となる場として広場を利用してほしいです。

復興祈念公園に込められた思い

公園の整備には石巻市職員をはじめ、全国各自治体からの応援による多くの派遣職員も携わってきました。そこで、職員を代表して4名の派遣職員の皆さんと近隣住民を代表して「かどのわき町内会」の本間英一会長に、公園への思いを聞きました。





成長見守る祈りの森



芝生が整備された四丁目北広場。あずまやも設置され、市民が憩える場として利用される。



園内には、ベンチやあずまやも設置されている。苗木が成長する公園で静かな時間を過ごすことも出来る。



二丁目広場では市民による、震災の伝承活動が継続される。



みやぎ東日本大震災津波伝承館。施設の最も高い所がこの地を襲った津波と同じ6.9メートルの高さ。



二日月形の献花台が置かれた「祈りの場」。人々が善海田池の先にある海にむかって手を合わせ、花を手向ける場所。

園内を紹介！

南浜町の記憶を残す

公園には日常生活の中で人々が行き交った「道路」や「交差点」が残されている。木々が成長すると現れる松原や、水辺の湿地は市街地化する前の土地の状態を再生したもの。広場や丘に町の名前が残る園内の様子を紹介する。

街の記憶を伝える園内

南浜町は、1966年5月1日に門脇地区で新住居表示が施行されたことで誕生した町の名前だ。それ以前、門脇町五丁目や南浜町一〜五丁目は「善海田」と呼ばれていた。日和大橋や日和山公園など、少し高い場所から、



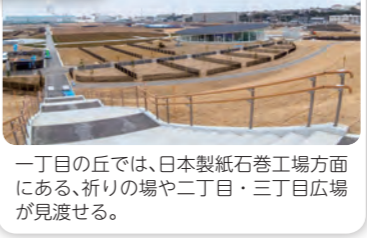
公園の北側を流れる「聖人堀」。震災前はコンクリートのふたで閉じられていた、暗きよだった水路だ。



伝承館の南側には、震災前、赤い鳥居が建ち並び、祀られていた「善海田稲荷」がある。



震災前と震災後も利用されてきた、雲雀野海岸に抜ける県道も整備された。善海田池を渡る道路となっている。



一丁目の丘では、日本製紙石巻工場方面にある、祈りの場や二丁目・三丁目広場が見渡せる。

整備が進む公園を望むと広く大きな池が見える。公園の10分の1を占めるこの池には「善海田」の名前が付いており、かつての地名を復活させたもの。既に野鳥が飛来し、再生させた湿地の中で、羽を休める姿も見られる。

池の中心には、かつての道路の交差点が残されており、池に浮かぶ小島のように見える。池を渡る道路にも、かつての入り組んだ道の跡が残されており、水辺の湿地が形作られている。

災の記憶を伝える森にしてい

園内を東西や南北に横断する道路は震災前から南浜町で利用されており、記憶を再生する手がかかりとなる。日常生活の中で行き交う人々の生活をつないだ街路網も残されている。公園を東西に貫く「中町通」も震災前の道路を残した道。「追悼の広場」を通り、東側の築山（一丁目の丘）を登る階段が続いている。東から二丁目、三丁目、四丁目と割り振られていた、かつての南浜町の区割りや広場などの名称にも使われている。

そして、高さ10メートルになる「二丁目の丘」を登ると公園全体を見渡すことができ、防潮堤の向こう側にある広い海も見える。体の向きを変えると、長く伸びる中町通の向こう側には日本製紙石巻工場の赤と白の煙突が見える。震災前から変わらないなじみの景色と、森へと姿を変えていく公園の風景が一望できる。

一丁目の丘へ登る坂道は緩やかな弧を描くように「みやぎ東日本大震災津波伝承館」へと向い、さらに、この弧は追悼の広場を囲むように続いている。

公園北側を流れる、聖人堀は地域の雨水の排水に利用され、震災前はコンクリートのふたで閉じられた暗きよだった水路。聖人堀も

また、街の記憶を次世代に伝える役割を担うことになる。

日常的に使える広場も

石巻南浜津波復興祈念公園では市民の日常的な利用も想定。その中心になるのが、石巻市が整備を進める西側の広い多目的広場だ。芝の「四丁目北広場」と、土の「四丁目南広場」では家族でピクニックやボール遊びを楽しめるほか、広い敷地を活かしたスポーツの利用も見込んでいる。

その南側にある雲雀野広場には公園のイメージに合わせて、落ち着いた色合いで配色された複合型遊具やターザンロープ、ネットトランポリンなど小学生向けと幼児向けの遊具が設置される。周囲には健康遊具も置かれるほか、大型のあずまやもあることから、親子で訪れ子どもを見守りながら、ゆっくり時間を過ごすこともできる。

公園の中心的広場となるのが「追悼の広場」だ。その南側、善海田池に面した「祈りの場」は二日月形の献花台が設置されており、訪れた人々が花を手向ける場所となる。街の記憶が残る復興祈念公園を訪問したら、追悼の思いを胸に、そっと静かに手を合わせてほしい。



四丁目南広場は土で整備された、多目的な場所として利用される。



公園を東西に走る「中町通」は追悼の広場、祈りの場、一丁目の丘の階段へ続いている。



雲雀野広場には、唯一、遊具が設置されている。目立ちすぎない色合いで、子どもたちが年齢に合わせて遊べる。



かつては湿地だった南浜地区の土地の履歴を再生した静かな水辺が広がっている。



善海田池を渡る道にも、人々がかつて行き交った街路網が残されている。町の区画や暮らしを再生する手がかりとなる。



善海田池の中には、震災前に使われていた道路の交差点が小島のように残っている。野鳥が羽を休める姿も見える。